

秋の日に(暑い夜続編)

叔母は私がバンコクに出発してから 3 日後に死んだ。だが、叔母にまつわる話はそれで終わらなかった。

タイへの出張は 2 週間ほどだった。帰国後、兄からの電話で、葬式とその前後の様子を聞いた。叔母の入院中、年下の叔父に連絡が取れなかったのは、母のすぐ下の弟にあたる、叔父の家族と仲たがいして自ら連絡を拒否していたからであった。母のすぐ下の叔父ももう亡くなっていた。母にとっては自慢の弟だったのであるが、兄も私も学歴が高いだけで薄っぺらなこの叔父嫌っていた。それでも叔母やその弟にあたる叔父にとっては兄である。叔父の生きている間はそれなりの親戚づきあいをしていたようだが、叔父が死ぬと残された家族、特に叔父の妻と叔母の間が決定的なものになった。叔父の妻にしてみれば、叔母が彼女の実家である叔父とその家族の家に、一時期居座って小姑として振舞っていたことへの耐えがたい思いがあったろうし、下の叔父や叔母にしてみれば、自分たちが味わった苦勞に比べて、順風満帆に見える叔父や、そのことを当然のことにしている叔父の家族に良い思いはなかったであろう。いずれにしても絶縁状態となったのである。叔母の死は私たち家族を含めて、関係が途絶えた果ての孤独死であった。

そのようなわけで、本来ならば、その実家である叔父の家に行くべき叔母の遺骨は、叔父の家族から受け取りを拒否され、実家の墓へ納骨することも許されなかった。遺骨はしばらく年下の方の叔父に家に預けられた。

兄は、叔母の遺骨を彼女の父母・兄弟の眠る母の実家の墓に帰してやろうと骨を折ったようである。叔母の葬式から 2 ヶ月ほどたったころ、兄から電話があった。墓参りに行く必要はないのだがとわざわざことわった上で、叔母の遺骨を母の実家の墓のある墓地にある、共同埋葬の墓に埋葬したので一応知らせておくということだった。共同埋葬だけど彼女の戒名は結構良い場所に彫られていると言った。私には良い場所という意味がなんだかよくわからなかった。

その日は秋晴れの良い天気であった。休日であったが午前中は研究室で仕事をした。気になっていたので、帰りに叔母の墓参りに行くことにした。子供のころに何回か来たはずだが、寺や墓地に見覚えはなかった。それでも狭い都会の墓地である。共同埋葬の墓はすぐに見つかり、叔母の戒名が正面の右下に書かれていた。線香を手向け手を合わせるともうすることがなかった。同じ墓地内の母の実家の墓を探すことにした。その墓は真新しく、花が手向けられ、これもまだ新しい塔婆が建てられていた。墓石には叔父の戒名と名前が刻まれ、その横に朱でその妻の名が刻まれていた。母や叔母の実家の墓というよりはそれはまさに叔父の墓であった。「そういうことなんだ。」となんとなく納得しながら、もし母

が生きていたら、彼女の性格からしてこの結末に絶対納得しないだろうと思った。思った瞬間に、そもそもこの顛末は、母の死にはじまったこと思い出して思わず苦笑した。

電話の最後に兄は、短期間ではあったけれど叔母はある人と同棲していたそうだった。行く必要がないと断りながら、叔母の墓のことで兄が私に電話をかけてきたのは、叔母の同棲の事を告げるためだったののだろう。兄の電話の声は何処となく弾んでいて開放感があった。叔母はその晩年すべてを見捨てられた存在として孤独にすごしたわけではなかったのだった。兄がそのことを私に話したのは、自分を納得させるためであったのか、それ以上に私に対する思いやりであったのかはわからないが、どちらにしても兄の優しさである。

見上げると抜けるような青空だった。私は叔母のために始めて泣いた。

(20060216)